

---

# Noisy Cafe ~雨宿りはいかが？~

ほたていか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Noisy Cafe ～雨宿りはいかが？～

### 【Nコード】

N9726U

### 【作者名】

ほたていか

### 【あらすじ】

「当方、悩み解決人。人捜しにペットの搜索。幽霊退治もお手のもの」とある田舎町にある喫茶店。そこには悩みを抱えた人間が老若男女問わずに訪ねてくる。

ミステリーでもなく、ホラーでもない。コメディイというわけでもない。ご近所ほのぼの青春群像劇、開幕です。

## Part 1 (前書き)

ジャンルとかどれが当てはまるのかよくわかりませんが、適当に  
選んじやいました。

特に深いテーマがあるわけでもないの、気楽に読んでいただけ  
ら幸いです。

よろしければ最後までお付き合いいただけるとありがたいです。

## Part 1

喫茶リコベロ。田舎町にある寂れた商店街の一角に、その喫茶店があった。刑事を退職した小野寺源蔵という初老の男が始めた小さな店。刑事時代から住民との交流を欠かさなかったおかげか、刑事を引退した今でも町の顔役として慕われている。

そんな小野寺を頼って、ここには様々な悩みを抱えた客が訪れる。高校生の甘酸っぱい恋愛相談や部活の悩みにご近所のトラブル。オカルト話が持ち込まれることもあれば、小野寺の元部下が殺人事件に関する事柄を持ち込む場合もある。

喫茶店のカウンター席、そこに一人の少年が座っていた。少年の名前は冴沼要。ここから自転車で三十分ほどの所にある城山高校に通っている一年生だ。学校帰りに立ち寄ったので、学生服のままだ。冴沼は学校の図書室で借りてきた本を片手にぼんやりと過ごしている。

「はい、コーヒー置いときますよ」

冴沼の前にコーヒーを運んできた少女は店主小野寺の孫で小野寺ひより。年は冴沼の一つ下で、現在中学三年生。町内の中学へと通っている。

くりくりとした大きな瞳が特徴的で、アイドルにもひけを取らない顔立ちをしている。少しくせのある淡い栗色の髪が実によく似合っている。身長は平均よりもずっと低いけれど、胸だけは成長を自粛していない。

ひよりはバイトという名目で祖父の仕事を手伝っている。その際に店オリジナルの刺繍がされたエプロンを身につける。その上からでもはつきりとわかるほどのバストサイズである。彼女目当てで通っている客もいることだろう。

「んー、ありがとう」

冴沼は返事をしながら、ひよりを見つめる。外見には文句はない。問題があるとすれば、その性格か。彼女には度し難い欠点があるのだ。

そんな冴沼の視線に気付いたのか、不審そうな顔で見つめ返すひより。

「何か用ですか？」

「いや、特に何も」

適当に返しながら、開かれた本へと視線を落とす。ひよりはふん、と呟きながら続ける。

「毎日毎日コーヒー飲んで良く飽きませんね」

「喫茶店の従業員がそれ言っているの？」

「あははー、それもそうですねー」

ひよりは舌を出しながらおどける。

「別に好きで飲んでるわけじゃないさ。マスターが頭痛を抑える効果があるっていうから飲んでるだけだよ」

そう言った冴沼の傍らにはピルケースが置かれている。中には掛かりつけの病院で処方してもらっている頭痛薬が入っている。

精神的な負担を受けると頭痛が起こってしまう。煩わしいことこの上ないが、うまく付き合っていくしかないと言われている。

なんとなく会話が途切れてしまう。そのせいで聞くつもりの中かたつた近くの席で繰り広げられている会話が耳に入ってくる。

「いやー、あんたもついに主婦デビューかあ。それにしても高そうな指輪ね。ちょっと見せてよ」

「いいよー。そっちのも見せてー」

窓際の席で、二人の女性が互いの結婚指輪を外し見せ合っている。それを見たひよりは冴沼に耳打ちをしてきた。

「あの人、髪が短い方ですね。不倫してるって噂ですよー。近所のおば様が語ってました」

冴沼にとって本気でどうでもいい話を振ってくる。別に知り合いでもない誰かさんが不倫していようと関係あるわけではない。

「聞いてます?」

ひよりは眉をひそめている。

「聞いているよ。ただ、そういう話に興味ないから」

「えー、噂が本当かどうか気になりませんか? 探偵としては放っておけません!」

ひよりはふんつと気合を入れる。これがひよりの欠点。シャーロックホームズばりの名探偵を気取っているのだ。もつとも、ホームズはご近所の不倫事情などに首を突っ込んだりはしなかっただろうが。

とにかく、一度言い出すと聞かない性格のひよりを黙らせるには、彼女の満足いく解答を与えてやるのが一番だ。

「はあ、彼女は不倫している可能性が高い」

冴沼の投げやりな言葉を聞いたひよりは口をあけてぼかんとしている。すぐさま我に帰ると冴沼に食って掛かった。

「どういうことですか? なんで言い切れるんですか?」

「彼女日焼けしてるだろ? ほら、襟元から覗く肌の色と外に晒されている肌の色が随分と違う。で、指輪を外した薬指。指輪の日焼け跡がない。あれは日常的に指輪を外して行動してるってことだ。主婦が指輪を外して行動する理由なんてそう多くはないだろう」

冴沼は言い終えるとコーヒを一口啜る。口の中に苦々しい味が広がった。

「おおおお、なんか凄いですね。見直しましたよ。じゃああの人は不倫してるのかー。旦那さんは可哀想ですねえ」

テーブルを布巾で適当に拭きながらひよりは呟く。なんとなく後味が悪かったので冴沼は陳腐な推理を続けた。

「彼女、テニスが趣味だ」

「はい?」

可愛らしく小首をかしげるひより。

「右腕と左腕の太さが若干だけ違う。あれはテニスをやっている人に多い特徴だ。右手に肉刺みたいなのも出来ている。テニスをプレイするなら指輪を外すのも頷ける。つまり、可能性が高いとは言っただけ、確実に不倫をしているかはわからない」

「じゃあ不倫してないんですね！」

なぜだが嬉しそうな顔で冴沼にぐつと寄ってくる。ひよりから視線を逸らしながら、言わなければいいのに、つつい口を滑らせてしまう。

「テニスがかきつけで知り合った男と不倫してるかもね」

「むー、結局どっちなんですかあ。というか、なんですかその無駄な推理力は」

推理力とは何なのか。せめて洞察力と言ってもらいたいところだ。

「もつと見せてくださいよ。ほらほらー」

冴沼を急かすように、椅子に手をかけその場で飛び跳ねるひより。その豊富なバストが跳ねる体に合わせて動き回る。目のやり場に困ってしまう。

「嫌だよ。こんな他人のプライバシーを侵害するような事。人様の秘密を暴いて楽しむなんて下品な趣味は持っていないからさ」

冴沼の答えでは満足出来なかったのか、ひよりは腕を組んで唸り始める。しばらくするとわざとらしく手を打った。

「じゃあ最後に一回だけ見せてくださいよー。それを参考にして私も探偵道を極めますから」

「た、探偵道？仕方ないな。じゃあマスター」

そばで聞き耳を立てていた小野寺に話を振った。突然指名された小野寺は少し慌てながらも応じてくれた。

「マスター、昨日、娘さんと喧嘩しませんでした？」

小野寺はまいったなーと頭を掻いた。

「どうしてわかったんだい？」

「秘密です」

含み笑いをしながら冴沼はコーヒーを飲んだ。当然、そんな答えでひよりは満足してくれない。

「もう、ちゃんと答えてくださいよ!」

ひよりが手に持った布巾を握りつぶしながら睨みつけてくる。仕方がないので冴沼は嘆息混じりで口を開いた。

「マスターのワイシャツ、ヨレヨレですよ。いつもはパリツとしたの着てるじゃないですか。朝いつも娘さんが用意してくれるのに今日はしてくれてなかった。だから、その辺に置かれていたまだアイロンがけのされていないワイシャツを着てきた。違いますか?」

「……正解だよ。いやはや、まいったねえ」

小野寺は苦笑している。冴沼の横では、そんな小野寺と対照的にひよりが盛り上がっている。

「わあ、当たってますよ。おじいちゃんったらママがいないと服一つまともに用意できないんですよ。刑事道一直線だった人はいけませんねー」

軽く自分の祖父を詰りながら大喜びするひよりを放置し、冴沼は今朝方の出来事を思い出す。

冴沼が学校へと向かうルートの一つに商店街を抜けるというものがある。時間にゆとりがあったので、自転車を押しながら商店街を歩いていると、商店街の中央部、天窓からの光を受ける噴水の辺りで見知った顔と出くわした。

「おはようございます」

冴沼が挨拶をすると、その人物は派手なりアクションをしながら後ずさった。

「わあっ！つて要君じゃない。びっくりさせないでよね」

驚いた女性、小野寺こよみは冴沼の姿を確認すると胸を撫で下ろしていた。彼女は喫茶店マスター小野寺源蔵の娘で、ひよりの母親だ。実年齢は三十八歳だが、見た目だけで言えば二十代後半でも通りそうなほどに若い。ひよりとは違い身長は一般女性の平均値ほどはある。

彼女はボサボサの髪にスーツ姿だ。違和感を覚えたのはその足下。スーツには似つかわしくない真新しいスニーカーが履かれていた。手には黒のヒールが握られている。

「どうしたんですか？そんな格好で」

「あの糞親父よ。私の言い分なんか聞きやしないわ」

「つまり喧嘩したと？」

「そういうこと。慰めておくれー」

突然こよみは冴沼に抱きついてきた。冴沼はぎょっとしたが、簡単に振りほどけそうになかった。

ひよりと彼女の共通点はいくつかある。幼く見えるアイドル並みの顔立ち。奔放な性格。そして、その豊満すぎる胸元の脂肪。つまりこの密着状態は思春期の少年には何とも耐え難いものなのだ。

「ちよっと、こよみさん。離れてくださいよ！っていうか、ほんのりと酒のにおいが」

「なにをー、お姉さんに抱きつかれて嫌がるとは。それでも青少年か！」

こよみはさらに両腕に力を込める。

酒のおいはするものの、おそらくほとんど抜けているだろう。

彼女はアルコールに相当強い。まるで水のように酒を流し込める体質だ。この程度ならシラフも同然だろう。

そう。酔っていない状態で冴沼は抱きつかれているのだ。酒に酔うと泣く者、怒る者、笑う者。服を脱ぎだす者もいればキスをする者もいる。これらは酒の席に付き合わなければ回避できる。しかし、彼女は違う。普段のスキンシップからして異常なのだ。これが彼女の普通だ。彼女と出くわした段階で回避不可能だ。

「んー、ちょっと筋肉ついた？抱き心地が良くなったような悪くなつたような」

こよみは冴沼の体をまさぐる様に手を動かした。その度にえも言われぬ高揚感を覚えてしまいそうになる自分が恐ろしかった。

「いい加減にしてくださいよ！まったく」

冴沼は強引にこよみを引き剥がし、額の汗を拭った。心臓は早鐘を打ち続けている。

こよみは残念そうにしながら、噴水の縁に腰掛けた。

「旦那が死んでから私も色々アレなのよ？このくらいは多めに見なさいよー。嫌がってるくせに、私がもし他の男に同じ事したら悔しいんじゃない？」

「それは……」

こよみに言われて想像してみる。見知らぬ男に抱きつくこよみ。

こよみの読みどおりなのは歯がゆいが、確かに良い気分はしなさそうだった。

「ふふ、お姉さんは要君ならいつでもオーケーよ」

何がオーケーなのかは知らないが、こよみは艶かしそうに髪を掻き揚げている。その仕草が様になっているから困ってしまう。

「そうそう、何かゴミ屋敷が出来ていたわね」

「ゴミ屋敷？」

「ええ、北の方に田んぼあるじゃない？あの近くの林の中にね。あれって誰か住んでるのかしら。それともただのゴミ置き場なの？場所はね」

こよみは聞いてもいないのにゴミ屋敷の場所をペラペラと喋りだした。一頻り喋って満足したのか、こよみは鞆を肩に引っ掛けて立ち上がった。

「それじゃあ私は父さんの目を盗んで、着替えた後会社に行くわ。じゃあね」

ウインクを一つ放ったこよみは住居兼喫茶店であるリコペロへと走り去っていった。

扉に備え付けられた来客を告げるベルが鳴らされる。その音で沼は現実へと引き戻された。

「マスターいるかい？」

入ってきたのは五十代の中年女性。同じ商店街内にある金物屋の村上だ。パーマの当てられた髪、少し肥えた体、『近所のおばさん』という言葉が良く似合う人だ。

「どうしたんだい？」

小野寺が答える。村上は少し困り顔でこちらに近づいてくる。

「北側の畦道にお地藏様があるのは知ってるだろ？そのお地藏様の首が無くなっちゃまっているのさ。誰かが持ち去ったのか、もしくは何かの祟りなんてこともありそうだね。ちょっと調べてみてはくれないかい？」

村上は身振り手振りを踏まえながら捲くし立てた。地藏の首を見つけてくれと小野寺に依頼しに来たのだ。

小野寺は顎に手を当てて、しばらくの間考え事を始める。そして、おもむろに沼の方へと視線を向ける。

「要。ちよつと調べてきてくれないか？私は手が離せなくてね」

そう言いながらも小野寺に取り立てて忙しそうな様子は見えない。突っ込んだところで徒労に終わりそうなので気にしないでおこう。

「俺？大した力にはなれないと思いますけど」

「そんな事はないだろう。その才能を生かせるチャンスだ。他人の役に立つためなら使ってもいいんじゃないかい？」

今度は冴沼が考え込む番だった。小野寺の提言はもつともだ。他人の秘密を覗き見るくらいにしか役立ちそうにない無駄な洞察力。それを前向きに使う良い機会ではある。

「わかりました。やってみますよ。何をすれば？」

決心をした冴沼は小野寺に尋ねる。小野寺は扉の外を指差して言った。

「まずは現場検証だな」続いて村上の方へ向き直る。「というわけで、今日から要が皆さんの悩みを解決しますので、よろしくお願いします」

今日からという言葉に拭いきれない不安を感じずにはいられない。

「マスター、今日からって」

「よろしくね！お兄ちゃん！」

冴沼の抗議は村上のプロレスラーかと思紛うような手に中断させられた。ばっしばっしと痛いくらい背中に掌を打ち付けられる。痣にならなければいいのだが。

冴沼は村上を振り払うかのように席を立つ。

「そ、それじゃあ行きましょうか」

「待つて下さい。私も行きますよ。いいよね、おじいちゃん」

冴沼の後を追うように駆けてきたひよりは小野寺へと許可を求めている。小野寺はそれに対して二つ返事でオーケーを出した。

「どうせ店も暇だし」

やはり手が離せないほど忙しいなどとは真っ赤な嘘だったか。体よく押し付けられてしまった。

それでも不思議と悪い気はせず、冴沼は軽い足取りで外へと飛び

出した。

「うおー急げー！もう皆集まってんぞー」

「待つてよお。お菓子落ちちゃう」

ぱたぱたと二人の少年が走っていく。どちらとも冴沼は顔見知りだった。この間、秘密基地を作ったとかなんとか騒いでいたグループだ。

後方を走る少年はお菓子が包まれた袋を抱えている。近所の駄菓子屋のものだ。ちらりと見えたスナック菓子はコンビニやスーパーでは手に入らない珍しい商品だった。

少年達は茂みの中へと飛び込んで、すっかりと消えうせてしまった。

「若者は元気だな」

「あんたも十分若いじゃないか」

またも冴沼の背中を叩き始める村上さん。その手にうんざりしながらも歩を進める。

現在冴沼、ひより、村上の三人は件の地蔵を目指してひた歩いている。リコベロもある商店街を北に抜け、メインストリートとは名ばかりの道路を横切り十分ほど歩けば辺りは畑と田んぼに囲まれてしまう。小川に掛かった橋を渡れば目的地だ。

「これがお地蔵様ですかー。うわあ、本当に首が無くなってますねー」

ひよりは地蔵の前にしゃがみ込んだ。地蔵は首がとれ、頭のあった場所はぼつかりと空間が出来てしまっている。ひよりは胴体をひと撫でした後立ち上がり、唸りながら辺りを調べ始める。

「ここが犯行現場なら、きつと何か痕跡があるはずです。むむむ」ぐるぐると地蔵周辺を廻り続けている。自分の尻尾を追いかける

犬のようだ。進展は期待できそうになかった。

ひよりが地蔵の裏手側に移動したきりしゃがみ込んだので、冴沼は地蔵正面を観察した。ちらりと視線を向けると、村上は雑草を抜く作業に没頭しているところだった。せつかくの機会なので地蔵周辺を片付けようとしているのだろう。感心なことではあるが、こちらの作業を手伝っても罰はあたらないうに。

落胆気味に視線を下げると、地蔵の足下に何かが集まっていた。

「……蟻だ。お供え物を狙ってきたのか。あれ、何か落ちてる」

蟻はお供え物ではなく、地蔵の足下に落ちた屑に集っていた。手にとつて観察してみると、お菓子の屑だった。取り上げるのも可哀想なので、その屑は蟻のもとへと返してやった。

「冴沼さん、私はこれが何か重大な事件へのプロローグに思えて仕方ないです。名探偵の勘が告げています」

いつこちらにやってきたのか。ひよりは鬼気迫る表情で冴沼を見つめていた。

「例えばですよ。ここで殺人が起こったんです！犯人と被害者が揉めた拍子でお地蔵様の首が壊れた。もしくはですね、銀行強盗が逃げる途中でお地蔵様にぶつかったとか。他にもですね」

鼻息荒く力説を続けるひよりは、次第に冴沼のほうへと接近してくる。名探偵になることを夢見る少女はすっかり暴走状態だ。あわやしゃがんでいる冴沼の体にのしかからんばかりの勢いだ。

胸元の開いた服を着ているせいで、彼女が前かがみになっている今の状況は青少年には耐え難いものとなってしまっている。引き込まれそうな胸の谷間や、薄いピンク色したブラジャーなんかもチラチラと見えていた。

ひよりから逃れようと後ろに下がったところで、右手に何かが当たるのを感じた。そこにブラックホールでもあるかのように、ひよりの胸元へと吸い寄せられている視線を強引に向ける。すると、そ

ここには小さな黒い塊が落ちていた。

「あらお盛んねー」

村上の野次など気にはしてられない。

「ちよーっとストップ、ひよりさん！そのお、色々アレだから！」

「むう、なんですか。これからロシアのスパイが壊したという説をですね」

ひよりは体勢を戻した。冴沼も起き上がるうかと思っただが、もうしばらくはしゃがんでおいた方が懸命だと判断した。

「その無茶苦茶な説はどうでもいいとして」

「どうでもよくありません！」

「まあ最後まで聞いてよ。確信があるわけじゃないけど、一応犯人と首の在り処がわかった」

冴沼の言葉を聞いた瞬間、ひよりと村上は顔を見合わせ、きよとんとしていた。

どうにか平常運行へと戻った冴沼は、先ほど見つけた塊をズボンのポケットへと押し込みながら立ち上がった。

「今朝、ひよりのお母さんと会ったんだけどさ」

「えっ、そうなんですか？私聞いてませんよ」

「……あれ、いつてなかった？おかしいな」

小野寺家の喧嘩事件を見破ったフリをした時に触れていなかったのを思い出す。こよみから事情を聞いていたのが露見してしまう。

墓穴を掘った。

「目泳いでますよ？冴沼さんは嘘をついたり隠し事をするのが下手なんですから、すぐにわかっちゃいますよ」

「……………」

「おじいちゃんとママの喧嘩を見破ったのってもしかして」

「と、とりあえず。その時に聞いたんだけど、この近くにゴミ置き場があるらしい。場所は教えてもらったから迷わないと思う」

これ以上ひよりから氷のように冷たい視線を浴びせられるのは耐えられそうにない。冴沼は強引に話を打ち切り、重要事項だけを話す。

「ゴミ置き場ですか？そこにお地藏様の首が捨てられていると？」

まだ若干の不信感が残っているものの、概ねいつも通りのひよりに戻った。ひよりはそれが癖なのか、疑問が浮かんだ時にしている小首をかしげるポーズをとった。ふわふわの髪と相まって、その姿は子犬のように愛くるしい。

冴沼は咳払いをひとつして、少年達とすれ違った道がある方向を見た。

「正確にはゴミ置き場じゃなくて秘密基地だと思うけどね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9726u/>

---

Noisy Cafe ~ 雨宿りはいかが? ~

2011年7月22日03時12分発行